

硯 滴 考

[9]

令和三年六月吉日

公益財団法人

大平正芳記念財団



硯 滴 考

[9]

目次

はしがき	3
—NHK 総理にきく—	
選択のとき（抄）	4
—座談会—（月刊『文藝春秋』昭和54年3月号）	
円熟の時代を考える	26
政治に複合力を	44
大平政策研究会の九つのグループにおける発言（要旨）	52
公文俊平氏（元大平政策研究会幹事）に聞く 文化の時代への先見性	70
おわりに	94

はしがき

うつとうしい日が続いております。現在の我国は指揮者とバイオリン第一奏者だけの楽団のようなもので、寒心にたえません。然しながら、これを機に積年の弊を一掃し、再び離陸できればと思います。

今回、硯滴考第9号お届けいたします。おわりに（解説）は財団顧問の鈴木岩男氏にお願いいたしました。

令和三年六月吉日

公益財団法人大平正芳記念財団

理事長 大平 知範

— NHK「総理にきく」 —
選択のとき（抄）

内閣総理大臣 大平 正 芳
作 家 曾 野 綾 子

NHK解説委員長 家 城 啓一郎

（昭和五十四年七月三十日）

『永遠の今』（大平財団・昭和55年）、『大平正芳全著作集』5巻（講談社）に収録。エネルギー問題・増税問題・移民問題などの質問に答える中で、「政治とは、出来ることと出来ないことを熟慮・選択し、出来ることを真摯に有言実行すること」との信条を諄々と論じている。

家城 総理大臣に夏休みがおりになるのかならないのか、たぶんないと思うのですが、この八月の暑い中、どんなふうにお過ごしになりますか。

大平 八月は前後一週間ぐらい休ませてもらおうと思っていますがね。軽井沢か、箱根か、どちらかにまゐりまして。

家城 新聞に総理の一日の動向が出ますけれども、ほんとうにたくさんの人に会われるんですね、会議はあるし――。

大平 あすこに書いてあるほどのことはないんですね。その間、若干の合間がございますのでね。しょっちゅう寸秒おかずに人に次から次へと会っているわけでもございませぬね。

曾野 総理はどうお過ごしかなんて、非常に素人っぽい興味なんですけれども、一週間とおっしゃいましたか、そのあとはもう全部決まっていらいっしゃるんですか。

大平 だいたい。

曾野 まあたいへん。毎年そうでいらつしやいますか。

大平 そうですね。毎年大体そうですね。一カ月ないし一カ月半先きぐらいまで大体決まっていますね、それがだんだん埋まっていくなわけですね。

家城 充電するとなりますと、やはり今度の一週間の夏休みというのは貴重な時間でございますね。

大平 そんな野心を持っていませんからね。

曾野 お短か過ぎますね。

大平 そうかも知れませんが、そのぐらいしか取れませんね。

家城 せんだつて、日本人は働き過ぎだ、働き中毒というようなことばもありましてね、その働き過ぎ論に対する反省が過剰なぐらい出てきて、「じゃ休めというのか」というそういう議論がある。いま、日本人はそんな休むほどのレベルにまで全体が達しているのか、働き過ぎ論、反働き過ぎ論、総理はどうお考えですか。

大平 私は、先進諸国と日本と比べた場合と、昔の日本といまの日本と比較の仕方があると思うんですね。昔の日本といまの日本と比べた場合にはもう非常に変わってきて、そんなに無理した働きはしておりませんしね。昼夜をわかつた非常に重労働に耐えるなんていう事例はあんまりなくなりましたね。

曾野 総理の場合たいへんでもいらつしやいまいしょうけれども、お楽しみでいらつしやいまいしょう。私、たいへん同情がないんですけれども、人間いやなことでも働くのはかわいそうでございますけれども、楽しいことでしたら同情する必要ない……。

大平 同情する必要はないですね。私なんかに同情していただくと思わんですけれども、いまの一般に日本人は働き過ぎるじゃないかということに対して、いま、昔に比べたらそんなに働いていないじゃないかと、ただヨーロッパの諸国なんかに比べては、比較的働いておるほうかも知れませんね。そういう感じはしますけれどもね。

家城 さんだってサミットが終わりましてからNHKで世論調査をいたしましたら、「エネルギーの将来について不安だ」とこうお答えになった方が九二パーセント、それから「長期にわたって影響を及ぼすであろう」と七〇パーセントが心配しておられるんです。このエネルギーの将来について、なかなかわからない要因がまだ多うございますけれども、総理のご展望はいかがでいらつしやいますか。

大平 私はね、樂觀もしなければ悲觀もせんです。昔、まあわれわれが石油にこんなに頼らなくても産業も経営してきたし、生活もやってきたしね。けれども石油のほうが便利で安く、エネルギーがいいものですから、石油に頼ることになってしまいましたけれども、気がついてみると、石油にたつぷりつかってしまっている。輸送業、工業ばかりでなく、漁業から農業にいたるまで、みなもういまは石油を外しては考えられない。われわれの生活自体がそういうふうになっておりますわね。

「これはえらいことになった」と思いますが、しかし、これを全部早く切り替えていく言うてもなかなかむずかしいございますけれども、ただ、これを切り替える道はないわけでもないし、できない相談でもないと思うのですね。その努力をしていけば、非常に展望は暗いと言われますけれども、克服できない相談ではないと。しかし、それには相当苦労があると

思いますね。

ただ樂觀するわけではないんだが、しかし、悲觀する必要はないんじゃないか。手堅く、いま、石油が高くなる、あるいは入手が困難になればそれに代わる道を考える。まず節約する、代替エネルギー、たいへんむずかしいことですけれども、それを開発利用していくというのを丹念にやっていつて、そのできる範囲内において、われわれの産業の経営なり、生活のやり方を工夫していくというように、日本人は、そういうような点は、相当、どの国にも負けないように、やれるだけの能力を持っていると思いますけどね。

曾野 私、たいへんいつも態度が悪いんでございますけどね、見通しというのは、学者の先生方とか、政治家の方々とかいろいろとその道の大家がお集まりになってお考えになるんです。ございますけれども、正直言つて当たつたためしがないのですね。それですからね、あまり信じなくてもいい気がするんです。そういう見方はまちがいなんでございましょうか。

大平 それは当たつたらたいへんですよ。

曾野 ああ、そうでございますか、それで安心いたしました。

大平 見通しのように、そのとおりに世の中が動くということになったら私はたいへんだと思うんです。世の中はそのとおりにいかないからおもしろいで、ただその見通しが立てら

れると、それを一つの判断の目安にしまして、各経済主体が個人もあるいは企業も国も、まあいろいろな工夫するわけですね。ですから、見通しから必ずはずれますけれども、その見通しを立てておることがむだだとは言えない。

曾野 よき刺激でございますね。

大平 そういう意味において、その限度においてわれわれはやっているわけで。

曾野 いま、総理がおっしゃいましたけれども、どこの国にも負けないように代替エネルギーの問題でもやっていくと、私、日本人はやつてのけるような気が確かにするんでございますね。そうしますと、よいいなことも知れませんが、いわゆる先進国は、それでこの危機を乗り切ってしましまして、非先進国との間に大きな段差が将来つくんじゃないかという気がいたしますけれども、そういうことはお考えになりませんか。

大平 つまり、今までもこういう状態でありながら、だんだんと落差がつかってきましたね。ますますついていきましようね。

曾野 そうでございますね。

大平 しかし、ついていきますけれども、極端に言いますと、インドの昔ふうに生きておられる方々が幸せなのか、それから、もつと非常に進んだ便利な西ヨーロッパとかアメリカの

国民が幸せなのかという点、ちよつとまたこれ考えなければならんことになってくるので、私は、落差がつくということではできるだけ避けるように努力しなければならんけれども、それがあると、もう世界は、破滅だと考える必要はないんで、われわれはやるべきことをやると、発展途上国の方々もやるべきことをやるということで、それぞれのユニークな行き方があるんじゃないんでしょうか。

曾野 そうでございます。発展途上国の方々の行き方からわれわれの多くの精神的なものを学ぶということができまして、己が鏡のようなところがございますようで、——でも、いま伺っておりますと、総理はたいへんいい意味で分裂したお考えをお持ちのようでございますけれども、これは、私違つかも知れませんが、ごめんなさいませ。私、その分裂した方ってたいへん好きなんですございますけれども。

大平 分裂——。

曾野 ええ。両極のお考えが同時におありになる。そういたしますと、政治をなさいますとおつらくございませんですか。変な質問になつちやつて申しわけないんですが。

大平 一方に思い込んで、一方に片寄つてしまうと苦しいけれども、まあ、こういう、政治というのは、いろんな考え方を、なんと云いますか、調節をしながら、何か非常に立派なも

のでないかも知れんけれども、まあいまの分別はこういうことじゃないだろうか、ハイカラなことばで言うところとコンセンサス、こういうことじゃないだろうかというようなことを作りながら、いかだを流すようにもっていくわけで、一直線になんかうまくやろうとしても無理ですね。

曾野 当然、危険でございますね。ただ私も庶民というのは、たいへんセンチメンタルでございましょう？　ですから、道徳的なことをパツと総理がおっしゃって下さると非常にうれしい。「だけでも世の中というのは悪の面もいたらぬ面もあるんだよ」なんておっしゃると、「もう少ししっかりせい」なんて、そういうことを必ず言うと思うんでございますね。そういうものについてもご覚悟の上で――。

大平 毎日、言われているんですよ。

家城 いま、たまたま分裂ということばが出ましたけれども、いまのエネルギーに関しましてね、いまの生活水準、あるいは生活の快適さ、それを犠牲にしても節約に努力しましょう、とこういう考え方が一つある。逆に、環境がいくらか汚れても、石炭をたくさん使うことによって、あるいは原子力発電の不安があっても、自分はやっぱり生活水準を保ちたい、生活の快適さを維持していきたい、二つ考え方があって思うのですよ。

世論調査いたしますと、節約に努力というほうが多いですね、半分ぐらいで現在の生活を維持していきたい、少々空気が汚れても原子力の不安があつてもと、こうあるんですね。そういうような選択に一国の総理として非常にむずかしいだろうと思うんですけども、どんなふうにお考えになりますか。

大平 それはどつちもまちがいでして、いま、われわれが、あるがままの生活ですね、こういう生活水準を維持できている、こういう働き口を持つておる、収入の道をこれだけ確保できているという経済の全体の仕組みの中で、われわれ生きているわけでございますから、この経済の仕組みを根本的にやり直そうというこれは革命ですけれども、そんなことは誰も望んでいない。

しかし、これを支えておるエネルギーというものが細つてきたんだから、これはもう思い切つて消費も切つてしまう、生産も切る、雇用も落とすということになると、これはたいへんな激変を世の中に与えることで、私は、政治はそういうことをやつちやいかんと思いますね。

いまの状態を何とか、エネルギーが足らなくなったらそれをどうして補うかを考えて、いまの状態をできるだけ変えないように、できたらよくしたいんだけど、よくできないにし

ても、悪くしないようにわれわれは一所懸命にやるべきだと思いますね。それでいて、できないものがあれば、それはもう理解してもらわなければいかなと思えますけれども、そんなに思い込む必要はないんじゃないでしょうか。

日本人は、そういう時に、そういう変化に対しまして比較的よく私は適応してきたと思いますね。これは偉いと思いますね。諸外国は、先般サミットで大勢の方がこられましたけれども、「すばらしい」と言うてほめられましてね、ちよつとくすぐったい感じがしましたけれども、「こんなにほめられました、このような評価を受けました」なんて言う、また手柄になつちやいかんと思つて私も黙っているけどね。

家城 政治家のタイプで、これはウォルター・リップマンという人が言っておりますけれども、ポリテイションとステーツマンの違い、ポリテイション、政治屋というのは煽動すると、ステーツマン、政治家はこれは現実をもつて国民を教育すると、「あなた方は政治屋を選ぶのか政治家を選ぶのか」とこう言うのですね。いま、曾野さんおつしたのは、まさにいまどういふ状況かということ、ちゃんと説明するということが政治家の責任ではないか、そういうことをおつしやつたのですね。

大平 そうだと思いますね。私は、もう一つ言い添えると、リップマン氏の考え方に対し

て、ステーツマンを必要とするかポリティシャンでもがまんでできるか、それは、やっぱりその国情でございまして、いま、非常に偉大なリーダー、偉大なステーツマンシップを必要とする、一方において、それが無いとその国は持たないというような状態かどうかですね。

政治家ばかりを責める人もいけないんで、やっぱり国民の状態で、国民の期待にこたえた政治が行われなければいけないとすれば、その国の事情によってステーツマンを必要とする時はステーツマンシップを発揮せにやらんだろうし、私もよく言っているんですが、日本のような場合はね、あんまりリーダーシップなんてものはみんなやがりますよ。昔からそうでしょう、日本にリーダーなんか出たことないんです。だいたい国民のほうが非常に積極的で意欲的で行動的だから、それをできるだけうまく調節しながら全体としてひどいことにならんように、できたら全体の歩みがおかしくならんようにしていく、そういうことがいまの政治の最小限度の任務だろうと。

しかし、それにしても、いまおっしゃるように、いまの現実がどういう状態であるかということに対しては、明確にお話して、理解を求めることはいいと思いますが、それは必ずしも十分できておりませんね。

できておりませんのは、全体のピクチャーを初めからこうちゃんと順序よく問題にしてく

れるといいんですけれどもね。「ここはどうだ」とおっしゃるし、「ここはどうだ」と聞かれるものだから、「ここはこうでございます」なんて説明しておったら、全体として非常におかしいことになってますね。

例えば、「増税論を大平さん言っている、これはけしからん」という。私は増税論をいきなり言うんじゃないくて、財政はこのままではいけないんで、財政は再建せにやいかんと思っ
ていますと、そのためには歳出も削らにやいかんし、人員も削減せにやいかんし、しかし、同時に、いまの税制でできるだけ充実した課税を行って、なお足らなければまあ増税のほうもいつべん検討して下さいとおるんだけど、それを税の問題だけに限るとね、こういう前提を抜きにしてしまって、「これはけしからん」とお叱りを受けるんですが、ただ、冷静に政府の言っていることを、全体を公正に見ていただく、判断していただくと、そこでまだここに力点の置き方が足りない、努力が足りないというように指摘していただくといいいだけども。

家城 それは、増税というのはまさにおっしゃられましたように、安上りで効率的な政府、チープガバメント、そちらの努力を国民がある程度納得しないと増税のほうも「うん」とは言いませんですね。

大平 だから、それをまず行き着くところまで苦しいけれどやらなきゃならんわけですよ。

それが予算の編成というやつで、それをやって、なおこれを引き続いてやりますか、それでこれだけの財源が要りますがどうしますかという相談をしますから、その場合に、われわれとしては決断して「こういうことですから、こうしたい」というように国民の理解判断を求めるようにしたいと思います。

曾野 それが少しお足りにならないかも知れませんがね、税の問題。私、時々ぶつかるんでございますけれど、「日本は非常に税金の高い国だ」とか、そういうふうにおっしゃる方があるんです。もつと現実的に見れば、先進国の中で非常に高額所得者から取る率は高く、それから免税点の高い国であるということだね、はつきり、おっしゃるべきです。

大平 ええ、下のほうに安くなっておりまますからね。そういうふうになっているわけですから、だからもう少しこの辺り工夫を考えてみてくれんかということで問題にはなると思うのですよ。

家城 ただ、これまでやはり国の財政が四割方借金でやってきているというのは不健全ですね。これを総理はなんとかして再建を、とこうおっしゃるわけですね。

大平 これは、まあ石油問題に関連して、石油の値段が四倍にもなってきた、それだからそ

れで世の中はたいへん不景気になってきた、歳入が減ってきた、その場合に歳出も減らして、全体として、つつましくやっていくということを選択すれば、それで一つの財政がこんな状態にはならなかったと思うのですけれどもね。

家城 そう思いますね。

大平 しかし、あの当時私はちょうど大蔵大臣をしておりましたけれども、私の選択は、この石油ショックの重荷を一つ財政のほうで負担していこう、「それで企業も国民も従来どおりやっておつて下さい。いまここに嵐が吹いているのだから、この嵐の間、私のほうで財政でこの嵐は吹き止めておくから、あなた方は従来どおりやっておつて下さい。それで時間をかけてこの財政の負担、つまり国債の増発という問題は片づけましょう」という選択をしたのです。その選択は、私は誤っていないかと思うのですよ。

諸外国も「すばらしい選択だった」と言うてくれるのだけれども、しかし、重荷はここまです残ったのですね。だからこれをどうしても背負い切れないとほめられないわけですね。それをいまから残された半分の仕事をやろうというわけですからね。だから、いままでのやったことに対する罪障を払おうというわけですからね。

家城 切り詰めて再建するということ、それで、このままでもって増税でやっていく――。

大平 まず切り詰めなければいけませんね。みんな「そんなに言われるけれども、われわれは勘弁して下さいと言ってくれるけども、ここまでは切り詰めて下さいよ」と、ある程度の協力は得られると思いますよ。

しかし、それではね、とても単位が違うのですよ、財源の不足はね。それは何千億という金を出てくるかも知れんけれども、何兆円という金を出てこないのですよ。それほど大きな課題をいまわれわれは持つておるといふわけですから、そこで若干増税のほうの負担を増すことをこの際考えてくれないか、インフレを避けるために、われわれの生活を守るために、そうしてくれないかというのが、いまの問題なんです。

家城 一般消費税でいくのか、あるいは所得税、法人税の増収でいくのかですが、増税でいくのか、ここいらは、結局、こつちがだめならこつちというようにのつぴきならない――。

大平 こつちがだめならこつち――歳出の削減のほうでみんな片づけばそれでそんな必要はないのですけれどもね。そうでなければこちらでいきましようか、こちらでいきましようか、両方とも嫌いだったらず少しずつ両方やりますかとか、いろいろなことを考えたらいいんじゃないでしょうか、あんまり固く考えないで。

曾野 どの家も完全に幸せではないのでございますね。だから、せめて国家は完全であつて

もraitたい、社会も理想的であつてもraitたい、そういうような気持ちがあるような気がいたしますね。完全を求めるといふのは、私なんか想像できないことなんですけれども、けっこうそういう風潮があるような気がいたします。ですから、どこも同じで、家庭も国家も同じなんで不備だらけと言つてしまつたほうが簡単でございますね。

大平 そう言つと、「それは理想が足りない」、「熱意が足りない」とおつしやるけれども――。

曾野 でも現実はそのものでございましょう。

大平 だから、一所懸命にやつても、なかなか良い点数は取れませんよ。

曾野 それは、どこの家庭もそうだと思いますね。

大平 それが政治だと思いますね。

曾野 私ひとつ、お話が飛ぶかも知れませんが、難民問題をお伺いしたい。これは、お金と政治だけではなく、一つの哲学の問題が入つて、その時に、総理としてのお立場と個人のお立場とが分裂していらつしやるのじゃないかなあとか、それを一度伺いたいと思つておりましたのですけれども。

大平 いま、インドシナ難民というのはだいたい八十五万人ぐらい流出したでしょうか。

そのうち五十万人ぐらいがまだいき場所が決まらずに収容キャンプで暮らしているという状態で、三十五、六万人がまあ落ち着く場所が決まりましてね、アメリカがそのうちの十六、七万、フランスが七、八万というように引き受けてくれておりますが、日本はほとんどないんですが。この状況を見ておりますとね、やっぱり自分の身寄りというか、身内、相談相手がおる国にいますね。

それからもう一つは、その社会が受け入れる社会と、入れない社会がありますね。日本の場合は、日本にいつても誰も身寄りがいないということで、まず希望者がいないのです。それから日本の社会というのは、お互いは平気でおるかも知らんけれども、目に見えない壁がありましてね、外国の方々というのがなかなか入れない社会なんです。それを外国の方もよう知っていますよ。

それで、結局、私は、日本はいろいろ受け入れの枠をふやしてみても、いくら努力してみても、そんなに日本にこられる人は少ないと思います。したがって、日本としては思い切った財政援助をしてあげること、これにこたえないといけないのじゃないか。そして、そういうことでアメリカはじめ、諸外国は納得していますね。「日本は、そういうことでやってくれませんか」と、「実際に定住枠を拡大せいと言ってもあなたの国は無理です

な」ということは、だんだんわかってきましたね。しかしながら、定住枠の拡大もわれわれはやりますよ、努力しますけれども、非常に限られた人数しかできませんね。

曾野 その背後に、せっかく日本人は単一民族でやってきた所にそういう複合的な状況になると、これはセンシメンタリズムを離れて、「助けてあげたい」という気持ちとは別に、将来問題が起きるというふうな総理の考えはおありになりませんか。その心配はございますね、それも当然、考えられることだと思いますが。

大平 それは、日本人、私ばかりじゃなく、日本人が全体としてやはりこういう単一民族、単一国語で暮らしていくことを、あまり乱されたくないという気持ち、わかりますよ。わかりますけれども、こんなに地球が狭くなりましてね、相互依存がこんなに高まってきた時に、こんな態度でいいのかということを確認に、日本も考えなければいかんと思うのですが、いま、とても難民ひとつ取ってみても、三百人、五百人はなかなかできないのですからね、観念論としてそう考えても実際は動かないのですよ。非常にユニークな国ですね。曾野 そうでございますね。

大平 だけれど、こういう国柄だというのはしようがないので、諸国民が日本に定住されて、しかも、チャンと暮らしていけるというデモクラチックな国であってほしいと思います

けれどもね。何かまだとても距離がありますね。だから、じっくり時間をかけて日本の経済ばかりでなく、日本の生活自体の国際化というのは考えて行かないと。

家城 いま、国際化というようなことが出ましたけれども、日本はこれからますますそういうふうでなくてはならないだろうと思いますけれども、総理、わが孫や子孫にどういうような社会を残していつてやりたいかというふうにお考えになりますか、非常に抽象的ですけども。

大平 国際化という意味は、日本人が、足が長くなってみたり、外国語が上手になってみたり、非常にスマートな国際人になれるという意味ではないのです。そんなことになりませんよ。そんなことにはなれないのけれども、足は短いままでけっこうだし、色は浅黒くてけっこうですが、やっぱり日本人というのは、尊敬できる、評価できる人種である、日本人というのはやることをチャンとやっておる、日本が世界にあることが非常にありがたいことだと思ふような国になれば、ほんとうの日本の国際化じゃないかと思うんですよ。

そういう方向はできないことはないんで、それは現に、われわれは相当そういう方向へだんだん前進していていますからね。それで、相当ある面においては、非常に評価を受けるような国になりましたが、ある面においてはまだまだという状態でございますけれども、ま

だ努力によりまして、相当世界の尊敬と評価を勝ち得ることはできうるのじゃないでしょうか。そういう日本になりたいということですね。

日本の一億一千万の国民がここで非常に楽しいパラダイスを築こうなんというのじゃなくて、そんなことはできっこないんで、やっぱり世界の領海の中で、世界の地縁の中でわれわれは生きるわけですから、だから日本はチャンとそれだけの責任を心得ておる、役割を心得ておる、それだけの貢献をしておるといふ国民であつてはじめて生存も可能なんだし、そういう国民にはなれないはずはないんじゃないか。

曾野 日本というのは、二番手に何かをやる時には、たいへんスマートに常識のあるようにやるんでございますね。しかし、リーダーシップをとって人道的に日本が最初にこれをやるべきだとおっしゃったことが一度もないような気がします。そういうのは私の不勉強のせいでしょうか。

大平 いま、ここに国際会議場があるとすれば、国際会議でここに屏風が立ててあつて、そして、そこにツカツカといつてまず席を占めて周囲を見渡して、「おれはどういう順序で発言してやろうか」というように考える前に、そのつい立ての後のほうからまず様子をよく見ておいてね、（笑い）どうだろうか、いま、みんな座っているが、おれもそろそろ出ていっ

てよかろうかとか、なんかまだおぼろげに思っているような感じがするんですよ。また国際社会に、なんというか、なんとなくアウトサイダーである感じから抜け切れていないわけで、しかし、急に日本人がまたバカに出しやばっていくのを、必ずしも私はいとは思わんですけども、そういう状態から一步で、チャンとごく自然に座れる、そして自然に違和感もななくやっていけるというようにだんだんなってきましたよ。なりつつある。

家城 総理、いろいろお話をおうかがいして、やっぱりこの一九八〇年代にいいよ臨むに当たって、この時代をどういうふうに捉えられるか、特に石油の問題、エネルギーの問題が絡んでいかでございましょうね。総理のご認識。

大平 だから、一九六〇年代、たいへん繁栄の時代でございましたし、七〇年代は一応反省というか、踏みとどまっているいろいろな問題が出てきた時代でございまして、八〇年代というのは、きつと時代の精神が変わったいき方を取るのじゃないでしょうか。まあ、量的拡大より質的充実というようなハイカラなことを使っている人がありますけれども、そんな感じね。目に見えないもの、精神とか健康とか明るさとか清潔さとか、そういったこと、物質的な繁栄は目に見えるけれども、それも大事だけれども、大事かも知れませんが、もっと大事な目に見えないものがあるんじゃないかとか。

それから、戦争、平和の問題につきましても、武力を強くすることばかりが能じゃない。やっぱりわれわれは平和に貢献すべき道がほかにもつとあるのじゃないかと、ほんとうに文化的にいろいろ深く考えなければならぬ時代がきたのじゃないかとかね。いろいろな問題で、経済的な繁栄なんかをこれ以上むやみに追求できないかも知れませんが、もうひとつそれでいながら幸せな充実感を求める道がないはずがないのじゃないか、そういうようなことをお互いに国の内外を通じて探究していくべき時代じゃないだろうか、そんな感じがしますね。

家城 どうもありがとうございました。

―座談会―（月刊「文藝春秋」昭和54年3月号）

円熟の時代を考える

内閣総理大臣 大平 正 芳
学習院大学教授 香 山 健 一
放 送 作 家 橋 田 寿 賀 子

（昭和五十三年十二月二十一日）

前稿と同じく、『永遠の今』、『大平正芳全著作品集』5巻（講談社）に収録。
座談は、「信頼と合意」の大平政治への期待から「政治家と小説家論」、「田園都市構想」へと、そして大平の人間観、人生観、家庭観にまで及んでいる。

人間なんて弱いもの

香山 私は、このところ、毎年、鶴岡八幡宮へ初詣するんですが、統計では国民の七割近くが三が日に初詣されるようですね。

大平 国民の約七割、たいへんな数字ですね。

香山 正月は、除夜の鐘で煩悩を洗い流して、日本人が一年中で一番すなおな気持ちにかえる時なのではないでしょうか。

橋田 そうかもしれませんねえ。

香山 日本人が、自然体に帰って、すなおな心で来し方、行く末を考えるのが、正月だと思うんですが、最近はそれが正月だけではなくてきたような気もするんです。

橋田 とおっしゃると？

香山 日本の社会が円熟の時代に移行してきたためか、正月だけではなく、ふだんの暮らしでも、風雅とか、すなおさとか、心の豊かさとかいうものを、非常に大切にするような心境の変化が出てきているのではないのでしょうか。

大平 なるほど。

香山 例えば、総理はこういうご発言をされている。「人間なんて弱いもんですよ、愚かでもある。力んでみてもしょうがない。淡々と平常心でやればいい、という諦観ていかんです。」

大平 そう、そう。

香山 「が、そこにとどまっていはいかん、いずれは枯れる朝顔でも、毎日、水をやる——そういう気持を大事にしたい。」そうおっしゃっておられるわけですね。私は、こうした総理

のお考えが、たいへん自然に、国民に伝わっているような実感を抱いておるんです。

そこで、きょうは、総理の人間観、人生観を軸としてお話を伺いたいのですが、まず新年を迎えられてのお気持はいかがででしょうか。

大平 いま言われたように、日本人は清潔さというか、純粹さというか、そういうものを常に求めていると思うんですね。初詣、齋戒沐浴、禊さいかいもくよくといつた所作を通じて、一応、罪汚れを洗い落して、新しい汚れのない身となって仕事を始めたい。そういうことを繰り返してきている。だから、これは、歴史を貫いて、ずっとあるんじゃないでしょうか。その意味で、私どもは、今年も新しい意気込みで、仕事に打ち込まないといかんと考えております。

橋田 どんな年になるんでしょうか。

大平 恐らく今年もたいへん難しい年に違いなし、あるいはあやまちをおかすかもしれないけれど、まず今年は、そんなことのないようにひとつ全力投球してみたい。これは、私だけじゃなくて、全国民がそう考えておられるんじゃないでしょうか。

香山 一年の計は元旦にあり…。

大平 この気持が第一です。が、そうはいつても、弱い人間ですし、あやまちなきを期し難いし、政治にもその限界がある。今年も多分、そうだろうと思うんで、あまり高きを望むよ

りは、何事によらず、現在より悪くしないように心がけながら、少しでも良くなる道はないものか。良くなることができれば、ありがたいと思いますね。

香山 中庸の心ということですね。

大平 過大な期待はもっておりませんが、現在より何とか良くしたい。後退してはたいへんだ、そこは戒めてかからないかんじゃないか——内政、外交すべてそう思ってます。

政治は信頼と合意

香山 どうなんでしょうか、最近、憎悪と不信と対立の政治にあきあきし、政治にもっと信頼と合意とか、総理の言われる「和の政治」を求める気持が強くなってきたような気がするんですが。

大平 和の政治というよりは、もっと気持に忠実に言えば、納得というか、できるだけこなれた理解、そういうものを通してやらなければならん。

香山 目標を設定して、ゲイガイ国民を引っ張るよりは、むしろ問題を投げかけて国民と一緒に考える…。

大平 そう、そう。私は、政権をあずかる前から申し上げていますが、政治はやはり信頼と合意だと思う。大きくは国と国との関係、小さくは夫婦、親子、隣近所をはじめ、いろんな人間関係で、信頼の糸が切れたり、弱まっておればまずそれを繕い、修復していく、その中で納得を求めていく、これが和の政治じゃないか。それを日常実践していかなければと思うんです。

香山 橋田さんはテレビで家族関係を扱われ、たいへん評判ですが、この点は何？

橋田 私は、政治に全く関心のない主婦でして、ただ物価が上がらなきゃいいなとか、ためてるお金が目減りしなきゃいいなとかそんなことばかり考えているんです。

なぜ無関心かというと、今までの方はなにかいっぱいおっしゃるが、このへん（頭の上）を通り過ぎていくだけ、という気がするんですね。人間的魅力がなかった。あまり調子のいいことを言われると、どこまで信頼していいのか分らないで、とても困っちゃう。

香山 こちらのほうが恥ずかしくなる。

橋田 そうなんです。どうせダメだろうって気がするんですね。

でも、これは、総理になられた方とか、大臣の人間的なもの、お人柄でずいぶん違ってくると思うんです。政治への信頼度が。

香山 それはそうでしょうね。

橋田 あの方があ言つてらっしゃるんだから、大丈夫だとか。じゃ、私は家庭でこういうふうに将来を考えていけばいい、というメドが立つわけですね。

香山 そのとおりです。

橋田 ところが、こんど、総理の書かれたいろんなご本を拝見して、なにか人間の痛みというんですか、そういうのをすぐくご存じの方だな、という気がしたんですね。

貧しくていらしたし、坊ちゃんが亡くなられて——。私、あの話を読んで、すぐ泣いちゃったんですけど……。そういう痛みを持つてらっしゃる方が総理になられたということは、私たちにたいへん身近な感じがするんですね。

香山 私もその点は共感を持ちました。

橋田 そういう意味で、人間的に信頼できるということをもつと国民の半分に当たる主婦たちに分かせていただくと、安心して政治についていけるといえるという気がするんですね。

大平総理は、浮気もなさりそうなタイプではないし……。

大平 アハハハ。

香山 私も政治が三度のメシより好きだというような方はあまり好きになれません。その

点、総理は、家庭人、あるいは読書人として、時間をおもちの時の方が、心が安らいでおられるようにお見受けするのですが。

政界へのキツカケ

大平 それは非常に買いかぶりです、私はそんなに偉くはないんです。

政治は、いわば世の中の錯綜さくそうしてる利害を交通整理して、一つの秩序というか、まとまりをもたらす力ですわね。

香山 そうです。

大平 これは出来ばえがいい、悪いにかかわらず、この世の中、人間社会がある限りそういう役割が必要なわけです。だから、その役割が他の役割より尊いとか、値打ちがあるというようには私は思いません。

香山 控え目な役割ということですね。

大平 が、これはなけりやならんものであって、宗教、経済、学問、教育、芸能、文学とそれぞれの世界があるように、政治という世界もあって、それにはそういう役割を果たすもの

が必要となる。

たまたま私はほかに能がなく、政治へのキツカケがあつて、この世界に入ることができたわけです。

橋田 ……。

大平 別に鴻鵠こうこくの志があつたわけじゃなくて、「どうだ」「そうだな、それじゃあ、ひとつ」ということで入つたまでのものです。

香山 入つてみていかがでしたか。

大平 二十数年議席を占め、党や政府の役職もやり、同志もできてくると、私の体は私の体ではあるけれど、半ばは私の体でなくなってくるんですね。

で、自民党総裁への期待を持つてくれる人もできまし、それを断わることもわがままなことになってきて、それでまあ、六年前に総裁選に出たわけ。落ちましたが。

香山 その時、出た方では総理だけが。

大平 ええ、去年まで総理になれず、残りまして、皆さんのお手伝いをしてました。で、もうこのへんで、私もまあひと味ちがつたことをやらさしていただいてもいいんじゃないか、という気持ちもありましてね。

橋田 成り行きに任せて総理におなりになったけど、なったからには、なんとか国民にしてやりたいという、謙虚なお気持ちを感じますね。で、私は大いに期待してるわけです。

大平 ただ、あまり、日本民族は「乃公出だいこういでずんば蒼生そうせいをいかんせん」というような大それた考えはないんですよ。コンダクターとして、誤りのないようにやっていくのが任務じゃないか、と思っておるんです。

橋田 なんか私たちは、政治家というと、違う色の人に見ちゃうんですね。

大平 いやあ、政治家も別な人間じゃございません。平凡な人間ですよ。

香山 ところで、三十年代の高度成長期と、いまとでは、国民の暮らしとか、豊かさ求めるものが、ずいぶん変わってきたような気がするんですが、そのへんはどうお考えですか。

土のにおいがする

大平 確かに高度成長の結果、暮らしがある程度豊かになったと思いますが、といって、いま非常に豊かだということは言えないと思うんですね。また国民の大多数も、「豊かになった」という意識をお持ちだとは考えない。昔よりはまあ若干よくなったが、まだ欲求不満は

相当あるように私は思っています。

橋田 おっしゃるとおりですね。

大平 もっと豊かになりたい気持は分かりますが、いままでと経済の成長が違うので、それはなかなか難しい。そこでこのへんでもう一ぺん過ぎ来し方を振り向いて、一応、生活らしい生活にはなったから、まあ物は相談だが、その欲求不満のホコ先をもう少し生活の質の改善とか、ゆとりとか、身心の健康とか、そういう方向に向けてくれんか。

香山 豊かさの在り方というか、暮らしの質——ですね。

大平 そう、給料もむやみに上げられない状況だとすれば、ご満足ではないでしょうが、せめて一つの心掛けとして、生活の質、クオリティ・オブ・ライフなんて、ハイカラなことをこの頃いいますが、そういう内容の吟味をお互いにやってみるわけにはいきませんか、というのが、政治が国民に問いかけている相談だと思うんですよ。

橋田 太鼓をたくさんじゃなくて、説得する政治ですね。

大平 ええ。これではけりやなりませんぞとか、生活は、水準も内容ももう相当なところにきましたよ。だから……というようにうぬぼれてはいけませんよ。

橋田 そういうことを分かりやすくおっしゃっていただきたいですね。難しい言葉で言われ

ても全然わかりません。

大平 だから政治で非常に大事なことは説得力ですね。こなれた言葉で分かっていただけのようになれば、私はたいへんな政治になると思うんですけどね。

橋田 どうもいままでの政治家の発言は、外国の言葉みたいな感じがして。

もつとも、それはやっぱりお人柄だと思っんですよ。言葉の選び方も大切ですが、あの人が言ったら何となく説得されちゃう、そういうお人柄があるわけですね。

香山 とくに日本人には大事なことです。

橋田 土のにおいがするということは、日本人がすごく大切にしていることだと思う。格好ばかりいいというのはイヤなんですよ、主婦には。その点、総理には土のにおいがする感じがするんです。そういう意味で婦人層に語りかけてくださると分かるんじゃないかと、期待してるんですけど。

大平 そのように努めます。が、日本語というのはまことに難しい。もう本当にしみじみ感じるな。

橋田 私なんかも台詞ばかり書いて商売してますけど、本当に難しいですね。

香山 言葉の表現力と、言葉以外の表現力の問題がありますね。

橋田 演技力といいますが、例えばいろんな俳優さんが総理を演るとしても、やっぱり大平総理が一番誠実な感じがすると思いますね。その点ではたいへんお得な人柄で――。

大平 いやあ。あんまり買いかぶられちゃ困るんで……。

橋田 いえ、買いかぶってはおりません。なにかヤボつたいところがいい。

大平 アハハハ。

香山 いまのみたいへん自然体のご発言だと思えますけれどもね。確かに、これからの政治には、良くこなれた日本語による、豊かな表現力が求められますね。

政治家と小説家と

大平 「政治家は、小説家でないやいかん」そんなことを言った外国人がおりましたね。で、小説は、世の中全体の、人生全体のいろんなことを題材にするんでしょう？

橋田 例えば、テーマがありまして、そのテーマを見てくれる人にいかにうまく浸透できるかという、テクニクなんですね。

大平 それが政治なんですよ。政治家は小説を書けるぐらいの表現力を持たんといけないと

いうことです。それに演技力も。

橋田 演技力以前のものも大事ですね。

大平 日本では石原君なんか希有^{けう}な例だと思えますけど、英国でもデイズレリーなんかはそうですね。小説も書きましたわね。

橋田 フランスではアンドレ・マルロー。

大平 チャーチルもドゴールもすばらしい文学的才能をもっておられた。それで立派な水準を抜けた政治家になることができたと思うんですがね。私も小説を読みたいんですが、時間がなくて――。

橋田 小説読んでも何にもなりませんから、お読みになることはない。やはり総理のヒューマンなお人柄が土台になって、それをどう表現するかというのは、小説読んでも何にもならない。

大平 ならないですか。

橋田 はい。

大平 いや、私はそれを心掛けにやいかんのかと思つてね。

橋田 いえいえ、総理の人間としての言葉で語ってくだされば、それは小説以上のものだと

思うんです。で、小説家でなければならなかったその方の言葉は、「人間的でなきゃいけない」ってことだと私は思います。人間が分かる、相手の気持ちが分かる政治家じゃないと、数字だけの理念だけの政治家になってしまうということではないでしょうか。

「人間宰相」っていう言葉がありますが、そうなったら、すごく安心という気がする。

香山 「人間はすべて一冊の書物である。ただしその読み方を知っている人にとつては」という言葉があります。

総理のお書きになったものを読みますと、人間を良く読んでおられる。それがにじみ出ていると思うんですね。小説家も実は人間や人の生きざまを読むことから始まる……。

橋田 そうですね。人間が見えないところに何があっても見えないわけですから。

香山 さつき土のにおいの話が出ましたが、田園都市構想について……。

大平 土のにおいという、地方、農村という感じですが、東京でも土のにおいがなけりやいかんわけです。人間と土との関係を大事にしないといけないと思う。都市は人工的に再開発をやり遂げて、都市と人間との関係を回復しなけりやいかんじゃないでしょうか。

田舎は、逆に都市の持っている教育、衛生、情報などいろんな機能を十分に充足する。中枢神経が東京だけにあり、他の地域はすべて手足だという在り方は自然ではないばかりか、

安定性を欠いているし、民族の将来からすると非常に危険なものになつとるんじゃないか。
香山 近代化百年、新しい発想が必要ですね。

田園都市の意味

大平 だから全国にできるだけ平均的な厚みを持った、いろんな機能が一応充足した生活空間をずーっと作りあげていく。

それもすぐにくちくちというのではなくて、民族の追求すべき相当長期的な道標として、そういう目標を持ち、じっくりとやっていく。そうした頭にまずみんながなる。

橋田 リトル東京がどんどんできて、文化的にも経済的にもみんなが暮らせるというのが、もう一番の理想ですからね。

大平 ヨーロッパは、都市と森とがちゃんと適当に配慮されている感じですが、これは、相当歴史をけみ聞^きいてでき上がっているんでしよう。

日本は、ここ百年ぐら^{どろ}いで泥縄式どろなわにつくりあげた国です。こちらで一ぺん踏みとどまってやり直さんと、えらいことになるんじゃないでしょうか。

むろん、いろんな角度からアプローチしていきなさいけない政策課題ですがね。

橋田 教育機関の東京集中とか、お役所や企業の採用方法も変えませんかね。

大平 だからこの病いは重い。

香山 東京でも子供たちが自由に運動できるグラウンドや公園が欲しいし……。

橋田 ところでゴルフはなさいますか？

大平 やります。日曜ゴルフアード。

橋田 私、ゴルフをなさる方が大嫌い。

大平 どうして？（笑）

橋田 うちのオヤジさんが一所懸命ゴルフばかりやってイヤだから。（笑）それにお金がかかるし、私はもっぱらタダの水泳専門。

大平 アハハハ。しかし野球もきらい、テニスもきつい。がゴルフは歩くんですから相当高齢になってもやれるんじゃないですか。それにゴルフ人口も一千万、もうエリートのスポートじゃないと思うんですよ。

香山 生活が便利になって都会っ子が非常にひ弱になっている、という問題もありますが、やはり教育もこのへんで考えないと。

橋田 家庭教育の問題もありますが、学校も荒廃してますしねえ。

大平 教育というのは、まあ人間に備わった潜在的な能力を引き出すというか、一種の型に人間をはめ込むのではなく、人間それぞれの持っている能力を引き出すお手伝いをするとうもんじゃないでしょうか。

だから、もう少し自由にしてあげる面と、もう少し親切でなけりゃならん面と、いまやっていることを一ぺん考え直さなけりゃならん面もあると思うんですよ。

橋田 そうですね。今ちょうど反省期にきているんでしょう。「大学は出たけれど」という時代になって…。

香山 いろんな実験のできる学校をもっと伸び伸びとつくったらどうでしょう。人によって個性の相違があるわけですから。

橋田 各種学校が権威づけられてあるといいですね。

香山 政治が「ああせよ、こうせよ」ではなくて、そういう多様な試行錯誤が伸び伸びと自由に行えるような――。

大平 それで世界がまたそれを受け入れられるような。まあ、非常に曲がり角にきていると思います。これから急速に変わりますね。

橋田 そう思います。こうみてくると、いろいろな意味で戦後三十年の反省期ですね。いい時に総理になつてくださいました。

香山 国際化という面はどうでしょう。

大平 これからはますます国際社会に溶け込んでいかなきゃならので、教育だけでなく何事もそういう立場で行動する時は考えないといけない時代にきていますね。

橋田 女が考えてるのは、くれぐれも戦争の起こらないように。それだけです。

大平 われわれがこれでいいんだと納得しておつても、国際的な物差しがもう一つあつて、その物差しで見直してみる日本人にならんといけないんじゃないかと思います。

香山 日本だけで身勝手な行動をするわけにはいきませんか。それではこのへんで。

大平 どうぞ旦那^{だんな}さんにはゴルフをやらせてあげてください。

政治に複合力を

78年11月1日告示の「自由民主党総裁選への立候補に当たって」の政見全文。『大平正芳回想録 資料編』（大平財団、昭和57年）『永遠の今』、『大平正芳全著作集』5巻（講談社）に収録。一つの戦略、二つの計画の基本政策を提示。総理大臣就任後、二十一世紀に向けての九つのテーマの政策研究会の嚆矢というべき資料である。

はじめに——黎明にむかって

順調な戦後経営は、昭和四十年代の半ばからにわかに崩れはじめ、大地が揺れ動くような不安定な時期が続きました。国民の一人一人が、つぎつぎにやってくる衝撃を乗り切るのに、精いっぱいの日々でした。

いまなお、勤労者には雇用不安が、経営者には見通し難や円高問題が、中小企業者には構造不況や過当競争の圧迫が、農林漁業者には価格不安定や自由化の問題が、高齢者や主婦に

はインフレへの不安が、それぞれのしかかっております。

しかし、それらの不安や悩みを強調しすぎてはなりません。戦後三十余年、私たちは、幾多の試練にめげず、今日までよくやってきたではありませんか。私たちが享受している自由や平和や繁栄は、先進西欧諸国に比べても決してひけをとるものではありません。営々と努力して築きあげたこれらの価値あるものを、一時の衝撃によって台なしにしてはなりません。

時代は、急速に変貌しています。

そして長く苦しかった試練を経て、ようやく黎明が訪れてきました。あたりはまだ闇でも、頭をあげて前を見れば未来からの光がさしこんでいます。後を向いて立ちすくむより、進んでその光を迎え入れようではありませんか。

同志諸君。

このような時期における自由民主党総裁公選の意義には測り知れぬものがあります。それは、国政の針路を決める場となり、一億国民の命運の選択に通ずるものであります。

選択は、慎重で聡明でなければなりません。私は、みなさんの選択が必ずや時代をひらく鍵となることを深く確信し、この総裁選挙が日本の新たな出発点となり、新しい政治的勢力

の誕生をもたらすことを信じます。

政治姿勢——国民の合意の上に

激変する時代に、政治は機敏かつ効率的に対応しなければならない。イデオロギーの不毛な対立や硬直化した利害の対決は、政治に渋滞や混乱をきたすばかりである。

われわれは、権力志向に根ざす行政府の硬直した姿勢を戒めねばなりません。政治はつねに謙虚であると同時に、自己改革を怠らず、時代の要請に有効に応え得る構えがなければならぬ。

議会制民主主義、自由市場経済体制、そして現行安全保障体制など今日の社会の基本的な秩序は、いまやほとんどの国民の合意となった。いかなる施策も、これを守り、これを強化し、この上に展開されるものでなければならない。

私は、辛抱強い説得と理解、信頼と協力によってより広い合意を形成することを基本姿勢とし、しなやかだが強靱な、政治の確立を目指すものである。

また、行政の肥大化とタテ割り主義による非効率化を改め、安くつく効率のよい政府を実

現しなければならない。とりわけ、地方政治については、行政の中央集権への傾斜を改め、地方自治体による独自で機動的な行政力に委ねるよう措置する。

基本政策——一つの戦略、二つの計画

高度経済成長の成功によって、わが国は、所得の面では世界の一流となったが、社会や生活の基盤は、脆弱さが目立っている。この不足面を充実し、社会や生活の質的向上をはかり、均衡のとれた国家を創らねばならない。そのため一つの戦略、二つの計画、すなわち総合安全保障戦略、家庭基盤の充実計画および地方田園都市計画を基本政策として、これらを総合的に展開することにより所期の目的を達成する。なお、これらの施策には、日本社会固有の問題解決能力を十分にとり入れるよう配慮したい。

1 総合安全保障戦略を確立する

資源と市場のほとんどを海外に求めなければならないわが国にとって、世界のどのような

紛争も、その存在を脅かす。ましてや兵器開発が極度に進んだ今日、わが国が直接の攻撃対象となった場合には、到底単独でこれを持ちこたえることは不可能であり、これまでとられてきた集団安全保障体制ですら十分ではなくなった。そのため、わが国は平和戦略を基本とした総合安全保障体制を整え、その安全を確保しなければならない。すなわち、現在の集団安全保障体制——日米安保条約と節度ある質の高い自衛力の組み合わせ——を堅持しつつ、これを補完するものとして、経済・教育・文化等各般にわたる内政の充実をはかるとともに、経済協力、文化外交等必要な外交努力を強化して、総合的にわが国の安全をはかろうとするものである。

2 民間経済の活力ある展開をはかる

現在の最大の問題は、産業構造の転換から生ずる雇用不安と地域不況であるとの認識に立ち、それらの矛盾を経済の活力によって吸収するため、政府は、民間経済の活力ある展開を援助し、適正な経済成長の持続をはからねばならない。

なお、中長期の展望を明らかにしつつ資源、環境等の制約条件を克服するため、エネルギー

ギーをはじめとする科学技術の革新を進め、同時に産業の高度化と転換を促進する。特に農林漁業と中小企業については、その日本の特性を考慮し、たくましい経営を維持発展させるため、生産性の向上をはかる。

3 家庭を中軸とする日本型福祉社会を実現する

日本人のもつ自立自助の精神、こまやかな人間関係、相互援助の仕組みを十分に守りながら、これに適正な公的福祉を加味した公正で活力ある日本型福祉社会を建設する。わが国の家庭は、戦後の急激な変貌の余波と迫りくる高齢化社会の波に洗われて脆弱さを露呈してきた。この家庭の物質的、精神的基盤を急速に充実し、生活の質を向上して落ちつきと思いやり、ゆとりと風格のある家庭を実現するとともに、経済や社会制度上の不備を十分に吸収しうる対応力のある家庭をつくらなければならない。

より具体的には、家庭基盤を充実する総合的計画を策定し、雇用、老齢、健康、住宅、余暇、文化、教育等に適正な施策を行い、日本的な弾力性と複合力を十分に機能せしめるよう配慮すべきである。

4 田園都市を核に地方分権の政治を確立する

都市のもつ高い生産性とゆたかな田園の自然を高次に結合させ、健康でゆとりある田園都市のネットワークをつくり、地方生活圏を全国的に展開する。これによって国土の均衡ある開発をはかるとともに、税財源、雇用機会、教育文化機能、首都東京都市をはじめとする地方自治体に配分し、福祉等の行政機能も大幅に地方に委譲する。それぞれの地域に高次の自治機能をもたせ、多様な地場産業を育成、個性ある文化の花を咲かせる。

中央集権から地方分散へというこの計画は、同時に、大都市の過密の解消と生活環境の改善に関する具体策をも含まねばならない。とくに地震、火災その他の災害に対する防災、衛生、交通等の政策を充実し、大都市をそこに生まれ育った人間にとってふるさとを感じさせるようなものとしなければならない。

以上の政策運営にあたつては、社会的、経済的公正がはかれるよう細心に配慮する。とくに、税制や、行政面における不公正の放置は、国民の政治に対する信頼を著しく阻害するものであり、つねに諸施策、諸制度の見直しを怠つてはならない。

むすび——活力ある党、ゆるがない日本

わが自由民主党の活力の源泉は、党内に自由で多様な見解がつねに活き活きと息づいており、それが無数のパイプを通して日本社会のあらゆる階層、職能、地域と結びついていることである。私は、この自由でゆたかな源泉から、汲めども尽きない国民の創意とエネルギーがあふれだしてくるような政治こそ、これからの日本を戦後第二の黎明期にむかつて出発させるエンジンの役を果たすものと信ずる。

このような政治を実現し、ゆるがぬ日本をつくるため、私は、わが党の基盤をかため、党勢を拡大し、リーダーシップを強化することに全力を傾ける決意であります。

同志諸君のご理解とご支援を切望して止みません。

大平政策研究会の九つのグループにおける発言（要旨）

『大平総理の政策研究会報告書』（自民党出版局・昭和55年）に所載。『永遠の今』、『大平正芳全著作集』5巻（講談社）に収録。「大平政策研究会」は、総理就任後、21世紀を展望する9つの政策研究グループで発足した。21世紀4半世紀近い今、その提言の先見性が実証的に検証され始めている。なお、九グループにおける発言集のうち、「環太平洋連帯研究グループ」については、前8号で取り上げているので、本号では省略させて頂く。

(1) 田園都市研究グループにおいて

（昭和五十四年一月十七日）

(一) 田園都市構想というのは、今後、相当長期間にわたって、国づくり、社会づくりの道標となるべき理念である。人と自然、都市と農村に、ひとつの視点から新しい光をあてようとするものである。

これまでの政策と並列して付け加えられる政策ではなく、ましてや、特定の指定された都市だけを対象とするものではない。

既に実施されている政策も含め、公共事業計画も、住宅政策、福祉政策、文教政策も、個々の政策は、すべて、この理念に照らして吟味され、その配列が決められていく——そういうものである。

(二) 田園都市構想というのは、地域の個性を生かして、みずみずしい住民生活を築いていくとするものであり、基礎自治体の自主性を極力尊重していこうとするものである。

したがって、画一的な都市計画とか都市モデルをつくるとかいったように、パターンとして考えるものではない。

田園都市構想というのは、今日における地域主義の思想に沿ったものである。しかし、いかなる意味においても、かつてのような自給自足的な地域主義ではない。

それは、あくまでも開かれたものであり、都市と都市、都市と農村とのかかわり合いを重視する、相互に補完的なものである。

田園都市構想は、特定の地方都市だけを対象とするのではなく、大都市も含めて、全体としてみてゆくものである。

(三) 田園都市構想は、われわれの生活圏の形成に当たって、教育、文化なども含めて、人間の営みを広くとらえていこうとするものである。

子どもの育つ環境、生涯教育、それぞれの地域の中での教育、高齢化社会への対応、地域医療、地域福祉、それぞれの地域の文化、産業、すべての人間の営みが包摂される。

緑と自然に包まれ、安らぎに満ち、帰属意識の強い、そしてみずみずしい人間関係が脈打つ地域生活圏が全国的に展開されることが求められている。

大都市の過密の解消と生活環境の改善、そして大都市もふるさと社会と感じられることが求められている。

したがって、定住圏構想よりも、より広い理念的なものであり、教育、文化など人間の内面的なものに関心をもつていこうという質的色彩のより濃いものである。

(四) こうした田園都市構想の進め方については、党においても、政府部内においても、いろいろご意見があることであろう。

これについて、できるだけコンセンサスが得られていくよう、その指針となる方向づけができるよう、ご検討いただきたい。

(2) 対外経済政策研究グループにおいて

（昭和五十四年二月六日）

(一) わが国をはじめ世界各国は、今日、相互依存の度を高め、地球上に生起するどのような問題も、相互に鋭敏に影響し、地球全体を前提に考えなければ、有効な対応ができなくなっている。

世界に対する甘い認識や安易な対応は、もはや許されない。

(二) 今日の世界情勢およびわが国の置かれた立場からみて、対外経済政策をどのように推進していくかということは、極めて重大な課題となっている。わが国は、対外経済問題について十分の注意を払い、今後とも率先して国際社会に受け入れられる経済運営に努め、世界の期待に応えてまいる必要がある。

(三) 現在、日米間の経済調整は、なお焦眉の問題であり、また、六月には東京サミットも開かれることとなっている。現在わが国が抱えている個々の問題に対応する場合においても、全体としてどういうふうを考えていくべきかについて、基本とすべき考え方をご検討の上、ご提言いただきたい。

(四) 当研究会は、議長にもお願いしてあるように、あくまでも先生方の自主的な研究の場として運営していただきたい。自由な立場からご研究願ひ、世界経済に対応するわが国の経済運営について、システム思考というか、基本的な物の考え方を最終的にとりまとめいただければ幸いである。

(3) 多元化社会の生活関心研究グループにおいて

(昭和五十四年二月二十四日)

(一) 国民がひたすら経済成長を求めていた時代は過ぎ、国民のニーズとか生活関心は、極めて多元化している。このような中において、政治に対する期待とか不満をどのように受けとめ、対応していくべきか。

現在行っている施策なり、これから行っていく施策なりが、こうした国民の願望とかニーズとか期待とかいうものと、どの程度まで一致しており、どの程度まで一致していないのか。それをどのように考えるべきか。そうした国民の願望とか期待とかいうものが、どのようにすれば、政治の場におけるコンセンサスにまで高められるのか。

こうした問題についてご研究いただき、お教えいただければ幸いです。

(二) このような問題を科学的にご説明いただくばかりでなく、現在の国民の心というか、庶民の生活感覚をしっかりと把握しておられる方々にもいろいろお教えいただきたいと、広くお願いしたところ、お忙しい中にもかかわらずご参加いただき、心から感謝しています。

いずれの研究グループについても、一政権を越えて長期的視野に立ち、広く国民的立場から、自主的な研究活動をお願いしているところである。

特に、この研究グループにおいては、以上のような問題について、あくまでも中立的、客観的な立場から、理論的、また実際的な研究をお願いしたい。

現在、私どもが行っている政治、あるいはこれから行っていく政治について、国民の立場から民意に基づいてレビューし、ご批判していただくことを期待している。

(4) 環太平洋連帯研究グループにおいて

（昭和五十四年三月六日）

『硯滴考8』に掲載。

(5) 家庭基盤充実研究グループにおいて

(昭和五十四年三月十九日)

(一) 明治以後百余年の近代化の歴史を経て、わが国は、いま新しい文化の時代を迎えている。

経済的、物質的豊かさをかちえた今日、国民の間には、その成果を踏まえ、特に戦後の高度成長の過程で置き忘れてきた人間性や生きがい、生活の充実感を取り戻そうとの気運が強まっている。それは、新しい国づくり、社会づくりにつながるものである。

(二) われわれが直面しているこの問題は、先進工業諸国が共通に抱えている近代物質文明の超克という国際的な広がりをもった課題でもある。ただ、その現れ方は、各国によってそれぞれ異なってもいようし、その解決に当たっても日本的な手法が大切であろう。

こうした見地から、今回、田園都市構想と家庭基盤の充実という二つの構想を提唱した次第である。この二つの構想は、基本的には同じ理念でつながっているものであると思う。田園都市構想研究グループと両々相俟って、今後、長期にわたる国づくり、社会づくりの大きな方向をお示しいただきたい。

(三) 家庭は、社会の最も大切な中核である。落ち着きと思いやりで満ち、充実した家庭こそ、国民の安らぎのオアシスであり、日本社会の基礎構造をつくるものである。国破れて家庭ありというか、戦後のわが国の復興、発展を支えてきたものは、家庭であつたといえるのではないだろうか。

しかし、その後の高度成長に伴う経済、社会の大きな変化の過程で、家庭をとりまく環境も大きく変貌し、さまざまな問題が出てきているように思える。核家族化の進行、それと外の社会とのかかわり合い、高齢化社会への対応、といった問題をどのように考えていったらいいのだろうか。

(四) 政治が家庭に介入するようなことは、なすべきことではないし、政府が、望ましい家庭像のあり方などを示すことは、適当なことではないであろう。

しかし、現にいろいろな問題に直面している家庭の基盤を充実したものとし、ゆとりと風格のある安定した家庭の実現を図っていくうえで、家庭自らの自主的努力と相俟つて、政府が何かお手伝いすることがあるのではないだろうか。

こういったことについて、皆さま方に自主的な立場から自由にご研究いただき、ご提言を賜うことができれば幸いである。

(6) 総合安全保障研究グループにおいて

(昭和五十四年四月二日)

(一) 今日、われわれの住む地球社会は、ひとつの共同体として、その相互依存の度を高め、ますます鋭敏に反応し合うようになってきた。このような「地球社会の時代」を迎え、地球上に生起するどのような問題も地球社会全体を前提に考えなければ有効な対応ができなくなってきた。特に資源と市場の多くを海外に求めなければならないわが国にとって、世界のいかなる地域のどのような紛争もその生存を脅かすことになりかねない。まさしく、世界の平和と安定なくしては、わが国の生存はあり得ない。

(二) ところが、国際政治は、いよいよ多元化の傾向を強めており、世界の経済秩序は、ますます不安定の度合いを高くし、局地的な武力紛争もかえって増加の傾向すらみられるのが世界の現実である。

このような状況の中で、わが国が名誉ある生存を確保するためには、わが国として、国際社会において期待されている役割責任をしっかりと果たしていくとともに、自らの安全保障のため周到かつ総合的な努力を払う必要がある。

すなわち、わが国は、平和戦略を基本とした総合安全保障体制を整備しなければならない。

(三) このような総合安全保障は、ひとつには、節度ある質の高い防衛力を整備するとともに、これを補完する日米安全保障条約の誠実かつ効果的な運用を図らなければならない。二つには、政治、経済、教育、文化等、内政全般の秩序正しい活力ある展開を図り、また、わが国にとって安定的な国際協力システムを作りあげるための外交努力を強化する等、わが国が保有するすべての力を総合的に結集してはじめて確保されるものと考えている。

(四) このような意味で、この研究グループの研究課題は、極めて幅広いものになると思われる。ここにお集まりいただいた先生方も広く各方面にわたっている。先生方には総合安全保障のもつ意味、その目的と手段等について自由かつ自主的な立場からご研究いただき、忌憚のないご提言をいただければ幸いである。

(7)文化の時代研究グループにおいて

（昭和五十四年四月九日）

(一) 私は、先の施政方針演説において、「文化の時代の到来」ということを申し上げた。

わが国は、戦後三十余年、経済的豊かさを求めて脇目もふらず邁進し、顕著な成果を収めてきた。それは、殊に明治以降の百余年において、欧米諸国を手本として進めてきた近代化、工業化の偉大な精華でもある。今日、われわれは、物質的豊かさと便利さ、自由と平等、高い教育と福祉の水準、発達した科学技術などを享受するに至っている。

しかし、いまや、近代化、工業化による経済社会の巨大な構造変化を背景に、国民の意識や価値観にも重要な変化が進行してきている。かつてない自由と豊かさは、人々の心に、これまでの工業文明や近代合理主義のもとで、ともすれば見失われがちであった人間性のいくつかの大切な側面への反省を促し、より円熟した、より高い人間的欲求を目覚めさせている。国民は、人間の内面に深く根ざした精神的、文化的な豊かさ、生活の質と多様性、自由と責任の均衡、家庭や地域や職場におけるあたたかい人間関係の回復、人間と人工と自然との調和のとれた共存を求めている。

このことは、近代合理主義に基づく物質文明が飽和点に達し、近代化の時代から近代を超える時代に、経済中心の時代から文化重視の時代に至ったとみるべきではないだろうか。

(二) 四囲を海に取りまかれているわが国は、古来から海外文化の影響を非常に強く受け、これを積極的に吸収し自分のものとすることによって、世界の中に独自の文化圏を形成してき

た。歴史的にみてわが国は、閉ざされた社会ではなく、むしろ世界に向けて広く開かれた国であった。

かつて異なった東洋文化の大いなる摂取に努めたわが国は、江戸時代三百年の伝統文化の一つの成熟期を経た後、幕末以来の近代国家づくりの過程で、西洋文化を積極的に取り入れた。この結果、この日本というアジアの一角にある島国のうえで、東方の文化と西方の文化との魂の触れ合いというか、世界的にみても意義の大きい出会いをすることになった。

いま、わが国では、東方の文化と西方の文化との混淆こんこうともいべき状況になっている。そして、カオスともいべきこの混淆が、未来に向けて何ものかを生み出す大きなエネルギーになっていくのではないだろうか。

（三）「文化の時代の到来」と申し上げたが、過去から現在に到る歴史を踏まえ、二十一世紀の未来に向けて、どのような文明の時代が開かれようとしているのか、さらに掘り下げて研究し、ご教示いただきたい。

このような文化の時代を迎え、東西両文化の混淆のなかから、二十一世紀の未来に向かって何が、どのような文化が生み出されつつあるのだろうか。わが国は、どのような方向を目指すべきなのか。そのなかで、国は、政治は、何をなすべきなのか、あるいは何をなすべき

ではないのか。

このような問題について、自主的な立場から、自由かつ活発にご議論いただき、ご提言いただきたい。

(8) 文化の時代の経済運営研究グループにおいて

(昭和五十四年四月十一日)

(一) わが国は、戦後三十余年、経済的發展を求めてわき目もふらず邁進し、顕著な成果を収めてきた。それは、殊に明治以降の百余年において、欧米先進諸国を手本として進めてきた近代化、工業化の偉大な精華でもあった。

しかしいまや、近代化、工業化による経済社会の成熟化、大きな構造変化のもとで国民の意識や価値観には重要な変化が起こってきている。人びとは、近代合理主義に基づく物質文明のなかで、ともすれば見失われがちであった人間性の回復に思いをいたし、人間の内面に深く根ざした精神的、文化的な豊かさ、生活の質と多様性、自由と責任の均衡、家庭や地域や職場におけるあたたかい人間関係、人間と人工と自然との調和のとれた共存、などを強く

求めるようになっていく。

このことは、近代化の時代から近代を超える時代に、経済中心の時代から文化重視の時代に至ったことを示している。世界的にみても、これから二十一世紀へかけて、文明の新しい時代が開かれようとしている。これらのことを私は、「文化の時代の到来」と申し上げた次第である。

(二) 明治維新以降の近代化、工業化のなかで、ともすれば過度に追求されてきた中央集権、中央集中の流れを、経済運営の面でも見直すべき時期にきている。

急速に欧米先進諸国に追いつくためにとられてきた中央指導の殖産興業の政治、その流れを汲む戦後の高度成長政策のなかで、国民生活、なかならず、経済活動に対しては、かなり直接的な指導・助成が行われてきた。いまや過剰となったこのような介入や政府に対する過大な期待は改めなければならない。

これによって、個性ある地域社会の形成や民間経済の活力ある展開が図られていくのではないだろうか。また、これによって、「安くつく効率のよい政府」の実現が可能となり、政治や行政に対する新たな要請や期待にも十分に対応していくことができるようになるのではないだろうか。

いまや、成長率などマクロの経済目標を掲げてひたすらその量的達成のために邁進するという時代は過ぎ去った。生活の質の向上を目指し、雇用、物価、所得など、経済の個々の問題についてじっくりと足元をみつめ、地道にこれに対応していくべき時代であろう。

このため、田園都市国家の建設、家庭基盤の充実、高齢化社会に対応した活力のある日本型福祉社会の建設を提唱している次第である。その実現のためにも、科学技術の革新、知識集約型産業構造への転換、個性ある多彩な地域産業の発達などを進めながら、環境や資源問題などの制約から比較的自由な生活財を中心に、次の活力ある経済発展を図っていくべきではないだろうか。

世界経済のなかで大きな比重を占めるに至ったわが国経済は、もはや自国にかまけた経済運営を行うことは許されなくなっている。産業調整、経済文化摩擦の解消、国内市場の一層の開放、対外経済協調の一段の拡充、幅広い経済・文化の交流の促進など、国際社会に受けいれられる経済運営に一層努めていかなければならないのではないか。

(三) 新しい文化の時代を迎えて、これからの経済運営については、従来より一層、政治的、社会的、文化的、心理的、工学的等あらゆる視野からの考慮が必要となってくるであろう。これからの経済運営は、どのようなべきか。このような研究を皆さま方をお願いする

に当たって、私は、ダニエル・ベル教授の「現在起きている状況を描写する用語を失ってしまった社会は不幸である」（『脱工業化社会の到来』三八五頁）という言葉を想い出す。

過去の発想や慣行にとらわれることなく、自由な立場から、自主的にご研究いただき、中長期的観点に立つて、指針となるべきご提言をいただければ幸いです。

(9) 科学技術の史的展開研究グループにおいて

（昭和五十四年五月三十日）

(一) 今日、人類は歴史上類をみない豊かな社会を築いてきたが、これは、人類の限らない英知によるものであり、まさに、科学技術の進歩の歴史であると言えるであろう。人類の英知は、人類がその過去の歴史において遭遇してきた多くの困難を乗り越え、新しい発明を生んできている。

しかしながら、戦後三十余年の目覚ましい科学技術の発展のあと、現在は技術革新の低迷期に入っているのではないかとの議論もある。人類社会が二十一世紀に向けて、文明の新しい時代を迎えようとしている今日、これからどういう分野についてフロンティアが開かれてい

るのか、歴史的かつ広汎な視野に立った検討が必要になっているのではないか。

(二) また、これまで、われわれは、科学技術の進歩を求めるあまり、その長期的ビジョンについて十分な考察を持ち得なかったのではあるまいか。例えば、巨大テクノロジーは、著しい発達をみており、また、生命の科学の進歩は人間そのものを問い直させるまでに至っている。このようななかで、社会科学と自然科学とのバランスのとれた進歩、人類の生存との調和のとれた科学技術の進歩、自然と機械と人間との共存といったものを、どのように図ってまいるべきかも大きな課題であろう。

(三) 科学技術の進展は、太平洋をひとつの地域として成立させるまでに至り、また、田園都市国家構想についても、ファイン・テクノロジーをはじめ科学技術の進歩がその実現の裏づけとなっている。

資源・エネルギーに乏しいわが国が、二十一世紀に向けて、その生存と発展を確保するためには、科学技術の革新が不可欠である。環境問題、都市問題などにとってみても、科学技術が当面する問題が多い。ただ、このような場合に、科学技術の水準が世界の第一流に達したわが国としては、従来のように、欧米先進諸国からの科学技術の輸入に依存することはできない。

日本人は、古来から獨創性に富んだ民族であり、近代化の過程において、急速に歐米の科学技術を受け入れ、それを自分のものとしてきたことも、わが国の科学技術の蓄積があつたからだといふことはよく指摘されているところである。今後は、日本独自の科学技術を開発するとともに、それを通じて、人類社会の発展に一層貢献を行つていく必要がある。

（四） 以上のような諸点について、長期的に、かつ広い視野からご研究いただきたい。このため、この研究グループには自然科学の先生方のみならず、広く各方面の方々にご参加いただいた次第である。自主的な立場から、自由闊達（かうたう）にご議論いただき、いろいろお教えいただければ幸いである。

公文俊平氏（元大平政策研究会幹事）に聞く 文化の時代への先見性

聞き手・阿部 穆

『去華就実 聞き書き大平正芳』（大平財団・平成12年）所載。公文先生は大平の政策ブレン・トリオのひとり。東京大学教養学部教授、国際大学グローバルコム所長を経て、多摩大学情報社会学教授。専攻は社会システム論・情報文明論。阿部穆氏は弊財団評議員（産経新聞政治部長、取締役・国際担当、長野放送副社長を歴任）。

政策研究会の中心は香山、長富の両氏

——大平さんが総理になられたのは一九七八年二月で、亡くなられたのが八〇年六月で実質一年半だったのですが、亡くなられる前に、公文先生、佐藤（誠三郎）先生、香山（健一）先生のお三方をお願いをして、政策研究グループというものを作られたわけですね。こ

れは幹事役として長富（祐一郎）さん、森田（一）さんがおられたわけですけども、お三方が最初に集まられて、そういうことをやってみようじゃないか、あるいは大平さんにインプットしてみようじゃないか、というようなお話は、どういうところから始まったのでしょうか。

公文 これは香山さんのアイディアだったと思うんですけど……。私どもは、それまで牛尾治朗さん（ウシオ電機社長）のやっておられた社会工学研究所を根拠地にして、三人で一緒に「グループ84年」というグループをつくって、いろんな活動をしていたんですね。最初が香山さんの書いた「日本の自殺」で、「文藝春秋」に掲載され、これを土光敏夫さん（元経団連会長）が読んでいたく感激されて、一〇万部かなんかコピーをとって配ったという。これは、のちに拡大・増補されて単行本になりましたけども。そのあたりがきつかけになって、他にも何人かの方が参加して、もう少し世間に対していろんな問題を訴えて行かなければいかんということもあって、たしか大きな書き物としては最初は『日本共産党「民主連合政府綱領」批判』というを本を、グループの名前で出しました。大平さんは多分、「日本の自殺」を読まれたんだろうと思うんですけども、それで土光さんから紹介が行ったのかなあ。ともかく大平・香山会談というものがありましてね、それで二人は意気投合したと

どうか、非常に面白いということになったんですね。しかも、たまたま森田一さんは、われわれの（東大の）同期です。それから長富さんは自身でずっと「グループN」というんですか、霞ヶ関のお役人の間の研究会を手広く組織していて、顔が広がったのですね。森田さんと長富さんがベアをつくって、それから香山さんと、その関係で佐藤さんと私と……。私が一番若いんで、あまりそういう枢要に触れるところは知らないんですけども、「やらないか」と話があり、「それは面白い。やりましょう」というんで、いろいろ企画を練り始めた。もちろん、太平さんが総理になられる前の話ですよ。

——「大平正芳の政策要綱資料」は、宏池会の安田（正治）さんとかフリーの福島（正光）さんらも関わったわけですか。

公文 もちろんそうだと思います。でも、あれは香山さんが非常に力を入れていましたね。

——あれは大平さんの最近の発言を、新聞を中心にテーマ別に詳細に拾いあげていますが……。

公文 香山さんというのは、そういう記録をとったり資料を整理したりすることが、非常に上手というか好きというか……。沢山、たちどころに出してくるんですよ。

——私の記憶によると、大平さんは総理になられる前後、何か村上泰亮さん（東大教授）の

書かれたものに興味を持っておられたような気がするんですが、それは関係ないですか。

公文 それもあるかも知れません。村上さんは三木（武夫）内閣時代に相当、積極的に関与して、「生涯設計（ライフ・サイクル）計画」を鈴木淑夫、蠟山昌一氏らとグループを作って協力したんですよ。だから、村上さんは「二代にわたってやるのはよろしくない。だから今回（大平内閣で）は私は退かしてもらおう。次の新しい顔振れでやるように」と言われました。

——今のお話だと、大平政策研究会の中心になったのは香山さんということですか。

公文 そうですね。香山、長富のお二人ですね。

——香山、佐藤両先生と研究会の幹事の選び方について、どんな相談をされたのでしょうか。

幹事の選び方と研究員の構成

公文 その頃、三人とも四〇代の半ばでした。この世代で一番頼むに足りる人なるべく沢山、集めて幹事になってもらおうということでした。少なくとも、われわれ三人で仕切ると

か、他の人を排除するということは絶対にやってはならん、という考えでしたね。それから社会科学系だけでは、まずいので、自然科学系を入れないといけないと思いました。それで茅陽一さん（東大教授）とか石井威望さん（東大教授）とかにお願いしました。清水博さん（東大教授）というとても素晴らしい方がいらっしやるのを知ったのも、その中ででした。それから関西のグループが大事だよということで、高坂正堯さん（京大教授）とか山崎正和さん（阪大教授）に入ってもらったのです。この点は特に香山さんが非常に氣を使っていたね。

——たしかに、京大の東大に対する対立意識は強烈ですからね。それから牛尾さんの社工研と先生方との関係はどうだったのですか。

公文 （株）社会工学研究所というのは牛尾さんの会社で、青山の豊川稲荷のところにありました。会社の業務自体は黒川紀章さん（建築家）を中心に運営されていて、黒川さんが所長、牛尾さんが社長です。われわれはその一角に間借りをして、牛尾プロジェクト的なことをやろうというので集まったのです。牛尾さんと浅利慶太さん（演出家）と私たち三人で、よく集まっていましたね。

——それで、香山、公文、佐藤の三先生の役割分担というか担当というのは、どういうふう

になっていたのですか。

公文 一番、頻繁に大平総理と会っていたのは、多分、香山さんでしょうね。それから三人で行こうということもよくありましたけれども……。大体、彼（香山）がそういう役割分担を考えて、それぞれこんなことをするか、というような案を出して、私はそれに従って「そうだね」ということで……。一番、中心になったのは、その「政策要綱」を実現するような、もっと具体的な提案をどうするかということと、それから、これまで村上さんのようなケースがあつて、多少、学者が政策立案等々に関わるといふ関係ができていたし、佐藤（栄作）内閣時代に楠田実さん（産経OB・のちの総理秘書官）が中心になって山崎正和さんとか高坂正堯さんとか、かなりのブレンができていたんですけども、それはあくまでも私的なブレンという形だったんですね。ですから、そこをもうちよつとオープンな形で参加することができるようになりたい、それから学者だけじゃ駄目だと考えた。これは霞ヶ関（役人）の若手がたくさん入ってくれて、そして一緒に頑張って議論しようじゃないの、という二点ですね。そこから、後に「大平スリーハンドレッド」と呼ばれるような、つまり将来、霞ヶ関の中核になるような若手の官僚、これからの日本の学界を荷担するような学者たち、それから現在、リーダーであるような方々を集める。企業からも勿論、数はそれほど多

くはありませんけども、将来、有望な中堅の方々に参加してもらいました。

——そうすると、官、学、産共同ということですね。いま、楠田氏が関係して佐藤内閣の時にいろいろやったのは、私も楠田氏の後輩でよく知っているのですが、あれは佐藤さんが政権を取る前に、「Sオペレーション」というものをやりましてね、池田（勇人）さんに対抗するにはどうしたらいいか、ということとで愛知揆一さん（衆院議員）をヘッドにして、いろんな方を集めて、三菱の岩崎ハウスか何かにチームを作って、そこで出てきたのが沖縄返還の提案でした。そこに若泉敬さん（京都産業大学教授）なんかが入ってくるわけですよ。だから、あれはかなり政治的な政、官、学グループだったわけですが、政策研究会の場合は、むしろもう少し、一大平内閣とか自民党とかということじゃなくて、かなり長期的なビジョンといますかね、そういうことがあったんじゃないかという気がするんですが、どうなんですか。

公文 日本全体のためにという、つまり大平内閣の政策をつくるというよりも、一九八〇年代、九〇年代にわたって日本が直面する課題に対して、どういう政策を考えるかということでした。これは非常に強い問題意識でした。と同時に、われわれは大平さんの書かれたものを読んで、大変感激しましてね。「大平正芳の時代認識」（『大平正芳——政治的遺産』に収

録）にも私は書いたんですけれども、七〇年代の初めぐらいから、大きな日本社会の転換期がきたということを鋭く見て取って、政治はこれに対応して行かなければならん、という問題意識を持った人としては、大平さんはまことに随一であると思いました。だから、そういう点で、そういう優れた政治家と一緒に仕事ができる、こんな嬉しいことはないという感じは、率直に言って持ちましたね。

——それで、実際に大平政権ができて、先生方の考えられたいろんな研究の成果、あるいは結論みたいなものを具体化するということになるわけですけども、その前に、この政策研究グループというものを、もう少し掘り下げようじゃないかということで、研究グループが九つできるわけですね。その経緯は……。

公文 具体化するどころか、まだ全部の答申が出ないうちに大平総理が亡くなられちゃったわけですからね。亡くなられる前に答申が出たのは、対外経済政策と環太平洋連帯と家庭基盤充実の三研究グループの報告書でした。

——公文先生は、対外経済政策と文化の時代と文化の時代の経済運営の三研究グループの幹事、研究員をされたわけですが、その分担はどういうことで決まったのですか。

公文 九つの研究を三人で三つずつ分担したのですが、要するに、私は経済関係とその他を

分担したわけですよ。香山さんが田園都市構想、家庭基盤充実と他に科学技術の史的展開を、佐藤さんが環太平洋連帯構想、総合安全保障の他に多文化社会の生活関心という具合に、それぞれ自分の専門ないし興味あるテーマを選んで、経済関係の二つは私ということになったのです。しかし文化の時代というのは、誰がやっていいのか分からないし、他の二人はすでに三つ担当しているの、「お前やれ」「いいでしょう」ということで私が担当になったというわけです。私自身そのテーマに興味はあったということもありましたが……。

——文化の時代に興味があったということですが、「大平正芳の時代認識」にも書かれてるように、これからは文化の時代だ、新しい歴史的段階に進むので、真の幸福と生き甲斐を見出すためには、国民の意識に路をつける必要があるのだ、ということで大平総理が言われて、それを具体的に、どういうふうに骨格をつくって行くのかということで、公文先生を始めとする皆さん方をお願いするわけですね。それについては、公文先生はどんなふうなことを考えられたのですか。

文化の時代を担当しての感想

公文 文化の時代を担当して非常に困ったのは、大平さんのいう文化の時代というのは長すぎるということでした。これからは経済の時代が終わって文化の時代だ、あるいは近代から近代を超える時代へ入って行くのだと言われるわけですね。その気持ちはよく判るのだけれども、それはなんぼなんでも言い過ぎではないかと思ったのです。経済の時代はそう簡単には終わらないし、近代もそうやすやすと超えられては困る。近代はそう簡単には終わらない。しかし文化もこれはこれで大事なことなんだと思い、そこをどうしようかと非常に悩んだのです。それで考えたのが六〇年周期説の中の一つの十五年として文化の時代を位置づける、つまり、政治の時代、経済の時代、文化の時代、紛争の時代と時代が移って行くというふうに考えた、その文化の時代が今なんだということで、私は何とか自分では納得したのですね。

——六〇年周期説というのは、どういうことですか。

公文 六〇年で一巡するということです。三〇年下り、三〇年上り、三〇年下り、三〇年上りというような恰好で、意識や制度が変わって行くというふうに見たのです。その前に、一五年周期という考え方を、一九七〇年代の後半に何人かの人が唱えたんですよ。山本七平さん（山本書店主）だとか深田祐介さん（作家）だとか日高六郎さん（東大教授）だとか

が、一〇年じゃなくて一五年で時代は転換すると指摘された。それは、たしかに尤もだとも思ったのです。戦争を大体一五年やって、それから戦後になると「暮らしは低く思いは高く」の文化国家で行こうと言ったのですよね。憲法を改正して政治改革をやった。つまり政治（改革）の時代の一五年があった。それから高度経済成長が五〇年代後半から始まってこれまた約一五年続き、七〇年代の始めには高度経済成長の終焉が言われた。それで次は何だということになったのですね。ですから、それは文化の時代なんだと考えたわけです。大きくみて、紛争、政治、経済、文化という四つの一五年期を合わせると六〇年、これで一巡すると考える、というところに行くわけです。ともかく一五年ごとに時代が変わる中での文化の時代と考えたわけです。

——それはよく言われる循環論とは関係ないのですか。

公文 一種の循環論ですけどね。

——それから大平総理は脱経済というか経済を超えるという話をしきりに、その頃、言われていましたが、脱経済といえ、いきなり経済は二の次で、文化だというふうに取られ勝ちですよ。そのところを、いま、先生がおっしゃったように、いや、そうじゃないんだ、経済も大事であると。しかし、だんだんこれから人間の生活というか文化が重要になってく

るのだ、というところの肉付けといえますかね。

公文 それ（肉付け）をしなければいけないということで、つまり経済の重要性はなくならないとしても、高度経済成長という時代は取り敢えず終わったという認識をもつこと。次ぎに反省をして、心の豊かさとか自然との共存、環境問題といったようなことを考えるフェーズ（局面）は当然くるわけですから、そういう意味では文化の時代と言っても、全然、おかしくはない。文化の時代がきたという自覚をもつことは、というのは広い意味で言うと、人間が自分を反省するということですからね。普段、無意識的に考えているようなことは何であつたのか、どういう価値観が自分たちの中にあつて、大切なものなのか、ということを考えてみなければならぬ、という点では、まさしく大平総理の言われる通りだということです。しかし、経済も大事だということで、長富さんが一工夫して「文化の時代の経済運営研究会」というのをつくつたんですよ。

——考えてみると、佐藤先生の担当された総合安全保障研究会、あるいは香山先生の担当された家庭基盤充実研究会も大事ですけれども、一番、大平総理が興味を持たれたのは文化の時代研究会じゃないですか。

公文 そうかも知れませんが。残りものといったのは、三人の中でテーマを決めていって残っ

た一つが若い私に回ってきたという意味ですから、重要でないということではありません。もちろん、大平さんとしては、非常に好きなテーマだったと思いますね。

——政策研究会での大平総理の発言とか表情で記憶に残っているものがありましたら……。

公文 文化の時代の研究会で、座長席に山本七平さんが据っていらつしやるのを、すごく嬉しそうな顔で大平総理が見ておられた記憶がありますね。

——私ら当時、政治記者として、そんなに総理大臣が張り切ったって、文化の時代に急になりはしないんじゃないかなあーと感じたんですけど。しかし、この前、公文先生がお書きになった「大平正芳の時代認識」を拝見すると、時代の先取りといえますか、大平総理自身も、それに協力された先生方も、矢つ張り新しい歴史的な段階にどうやってキャッチアップするか、という模索みたいなものをしていたわけですね。

公文 そうなんですよ。過去を反省し将来を模索するというのが、まさに文化の時代の特徴なんだ、というふうに考えたんですね。

——それを大平総理が誰かにインプットされたのか、それとも自分で考えたのでしょうか。

公文 自分で考えられたんじゃないですか。七〇年代の初めに、そういうことをいち早く言われた。まだ世の中はそんな感じではなかったですね。まだまだ高度経済成長が続くと見

て、これからはアジアへどんどん出るぞという時だったんですね。

——だから、それが結局、大平総理が亡くなって挫折して、稔らないわけですね。むしろ先生のご専門の分野である情報革命みたいなものが、アメリカのほうがずっと先取りしてしまふのですね。

公文 そこが逆に私も、後になって反省したというか、ちよつと「文化」を言いすぎたかなという面もあつてですね、経済が経済運営になつちやつたということだったのですが、実は考えてみると、すでにその頃から新しい技術・経済革命、情報革命の種子が蒔かれて育つていたわけですね、一九七〇年代は。

——日本ですか、アメリカですか。

七〇年代に情報革命の種子が蒔かれていた

公文 アメリカもそうですし、日本だって当然、そうあつて良かったんですよ。もともと、情報化ということを言い出したのは、日本が世界で一番早かつたわけですから。六〇年代の後半のことでした。ただ日本は、その後それを資源危機とか心の時代とか文化という問題に

直面して、情報化への関心がいったん消えてしまいました。違うものだと思ってしまっただけですね。実は情報化というのは、文化の時代と直結していたはずなんです。ところが、それを何かコンピューターとか情報処理とかいうのはそんなに大したものではない、価値が小さいものだという意識がどこかにあって、そこへ石油危機がきたものですからね、そんな（情報化の時代だなどという）ことを言っている暇はない。資源を節約し、過去の物づくりの力に頼って立ち直らねばならないというふうに、時代の雰囲気になっていた時だったわけですね。ですから、どうしてもそこで文化というと、心だ、自然だというほうが強調されてしまう。

——当時の雰囲気としてはコンピューターというのはハードだと思っていたんですかね。つまり作れと言われればいつでも作れるよ、というようなもので……。

公文 まだとにかく大型機全盛ですね。あの時分では、マイクロチップスは出てきていたんだけれども、パソコンなんていうのは、ほとんど有るのか無いのか分からない、ようやく七〇年代の終わりになって、少しずつ出てきたようなものでしたからね。

——企業によっては給料の計算とかに使い始めた所もありましたけれどもね。

公文 それは、しかし皆な大型機ですよ。せいぜいオフコン（オフィス・コンピューター）

という奴ですね。

——まだパソコンというものが、そんなに出てきていなかったけど……。話が飛びますけど、なんでアメリカは、八〇年代に入ってからですか、それとも八〇年代の終わりから九〇年代の初めにかけてからですか、急速に情報ハイウエーといえますか、進んできたのは……。

ジャパン・ナッシング論は九三年終わりから

公文 これもまた二転三転して、話がこみ入るのですけども……。アメリカは、まず半導体の発明とかの点では、七〇年代に先に出たわけですよ。ところが日本は、すかさず追い駆けたわけですね。ですから七〇年代の後半から八〇年代の前半にかけて、パソコンは大したことはなかったにしても、メモリーだとかチップだとかいう点では、日本はダートと前へ進んで行ったわけですね。それと石油危機を見事に克服したことで、そこで日本は世界一であると思い込んでしまつて、その次の情報化がお留守になつてしまつたということでしょうね。その間、アメリカは日本型経営の勉強を必死になつてして、いわゆるカンバン方式などを

リーン・プロダクションというコンセプトで理論化して、つまり日本が持っているなかで良いものは採るという方向に進んだ。それから、メモリーなんかで勝負してもしょうがないから、高度なCPU（中央演算装置）を作るという方向で切り開いたわけです。ですから八〇年代の終わりには、見る人を見ると、もう今度はアメリカだというのは、全部じゃないですけども、アメリカの中でも判っていた。しかし全体としては、まだ九〇年代の最初の二、三年、続いていてですね、まだまだ日本強しとか侮り難しとかいう論調があった。それが大きく転換して、日本遅れたりとか、ジャパン・ナッシング論になったのは、一九九三年の終わりでした。

——そこで話が元へ戻るんですけども、折角、先生方がそういう処方箋というか方法を出されて、大平内閣で総理が亡くなるまでに三つの答申が出るわけですね。あと伊東（正義）首相臨時代理の時に残りの六つが出るわけですが、とに角、先生方の結論が出たにもかかわらず、後の内閣では、中曽根（康弘）内閣が少し興味を持ったようですが、あまりその処方箋を具体化するところには行かなかったですね。

公文 直接にはね。しかし、中曽根さんは非常に真剣に受け取って下さってですね、「あの政策を継承するのが、私が保守本流になることだ」という言い方をされていたですよ。

——劇団四季の浅利慶太さんとか牛尾治朗さんとかいう方々が、相当、強く中曽根総理に大平内閣のあの研究グループの答申の活用を進言したと聞いているのですが……。

公文 私もそう聞いていますし、それから研究グループそのものを中曽根さんが使うべきだという進言をしたと聞いています。

——しかし、中曽根さんはかなり長期政権だったんですが、それでもちよつといまのお話の情報革命に遅れたわけですね。

公文 はい。そもそも九つの研究グループの答申の中には、情報革命の話はそんなに入ってなかったというか、その点がちよつと残念ですね。

——それでもう一つは、先生が書いておられる中で、大平総理の「楯円の哲学」に関してですが、これは何なんでしょうね。普通、政治家はこんな話はしないものですよ。極端なことを言うと、主流と反主流があつて、両方に緊張関係があることが、その党、政府にとって良いことだ、なんて言うわけがないですよ。

公文 でも、大平さんは真面目にそう思っておられたですよ。連合にしたって、パーシャルな連合で行こうとかね。一つがドーンと全部を倒してしまうとか得票を全部取るとか、いう考え方がおかしいと。オール・オア・ナッシングではないということですね。楯円の二焦

点論を重視しておられるということ自体は、香山さんに教えてもらったんですね。「大平さん、そう言っているよ」と。それで大平さんの本を読んでもみると、「あー、そういうことか」と判ったのです。これは非常に良い感覚じゃないでしょうか。それこそ、いまの情報化時代を先取りしていると言ってもよいですね。

——それは、非常に正と反といいますか、それがあつて、緊張関係が……。

情報化時代を先取りした大平さん

公文 絡みながら、しかし一体として、一方がなくなつては他方もなくなる、という相互依存であり、補完の関係に立っているんだという理解ですね。

——それは先生が見ておられて、大平政治がそういうふうな……。

公文 志向されていたと思いますよ。税務署長として税金にしても、ただ厳しく取り立てるのが能ではないと考えておられた。ある意味では少し余裕を残して、上手いことをやるくらいの余地がなければ、また政治にはそれくらいは大目に見るくらいの度量がなくては人はギスギスして生きて行けないといったような考え方もされていた。さらに、そこからの系とい

うのかな、ものごとはピシャッと割り切るべきものじゃないと……。

——それからもう一つ、先生が書かれたことです。地球社会時代の科学技術の発達に伴う人類の相互依存関係を、しきりに大平総理は言っておられる。

公文 これも非常に早いですね。世の中がグローバリゼーション（地球化）なんて言い出したのは、九〇年代になってから、つまり米ソの冷戦が終わってからですよ。大平さんは、七〇年代の初めですから、それよりもほとんど二〇年ぐらい前に言っておられたわけです。すよね。

——そういう意味では、日本の政治家としてはかなり先見性があると……。

公文 抜群にあったと思いますね。それから、グローバルと言った時も、九〇年代のとくに前半はまだ、これからはアメリカ的な競争時代になるといっている方をしていて、そうでもないみたいだよという反省は、やつと今頃になって出てきていると思います。つまり、コンペティション（競争）じゃなくてコラボレーション（協力）のほうが、もっと大事なな、コミュニケーション（交流）も大事だ、という反省が、他ならぬアメリカ社会の中から出てくるんですけれどもね。これも大平さんは先取りしているわけです。まさに、そういうのが七〇年代以来の時代の流れである、ということをやちゃんと見ていたんですね。

——そういう先見性を持った政治家がいたというのは、良かったかも知れないし、あるいは挫折したというのは残念だということですね。先生ご自身が個人的に接触されて、大平正芳という人はどんな感じの人でしたか。

深慮な面と好奇心の塊の面と

公文 ある種の魅力が非常にある方でしたね。私は佐藤（栄作）さんにお目にかかったことはないんですけど、聞くところでは、ある種の威厳があつて、なかなか面と向かつてものを言いくくったという話を聞いたことがあります。三木（武夫）さんはかなり個人的に親しくお付き合いさせていただいたことがありますが、三木さんは多分、息子の世代にあたる私のような者にとつては、いわゆる好々爺という感じでした。しかし大平さんは、そういうのではなくて、ある意味で対等な、しかし実に「深く考えておられるな」という感じと、それから好奇心の塊みたいところがあつて、あれこれと質問をされてですね、そして「フウン」と思うと、本当に嬉しそうな顔をなさるのですね、何とも言えないいい笑顔がね……。中曽根さんは、それに対して秀才ですね。（旧制）高校生の気質がまだ残っているよ

うなところがあつて、これまたなかなか魅力があるんですけど、大平さんとはタイプが違いますね。

——よく言われることですが、大平さんはキリスト教徒であつたので、普通の政治家ではない何かですね、祈るようなものがあつたんじゃないかと思うのですが、それはどうですか。

公文 そうかも知れません。しかしキリスト教の話をしたことは一度もないんですけどもね……。それから全く無責任な印象で言うと、キリスト教徒だつたから、大平さんのような政治家が生まれたのか、大平さんだつたからキリスト教徒にもなつたのか、というのかな……。四国の田舎で、ある意味で遅れた日本で、先進的な文明を見ていて、多分、灼けるような憧憬の念とか、英語を学びたいとか、といったような思いがあつて、そこから自然に、その世界をつくっている根底にはキリスト教があり、個人と神との関係というものがある、と理解して、それでキリスト教に入信したと。しかも、カソリックじゃない、無教会派ですよ。近代意識を持った、日本の当時のインテリが多分一番受け容れやすい宗教だつたと思います。

大平研究会の処方箋がいまや常識に

——先生方のつくられた処方箋は、二〇年後の現在の時点で見ると、どう評価されますか。

公文 私も九つの報告書を全部、詳しく読んだわけではないのでよくは分かりませんが、大きくみて、例えば総合安全保障とか、環太平洋連帯とかいう考え方は、もう常識になっていますね。ですから、そういう意味では、当時はなかなか言えなくても、勇気を持って言ったようなことが、この二〇年の間に「もうそんなことは当たり前ではないか」となったというところもありますね。他方、具体的な制度改革については、なかなか進まないというか……。私は、その頃から、さっきの六〇年周期で考えると、改革の時代というのは、——文化の時代の次に紛争の時代があるので——文化の時代になってから三〇年経たないとこないの、そうすると二〇〇五年頃からかなと、早ければまあ二〇〇〇年頃から本格的にやってくるのかなと考えていました。ですから、いま一生懸命こうやってはいるけれども、それが本当に世の中に具体的な政策提案として受け容れられて改革しようという大きな動きが出てくるのは、まだまだ先のことだろうなと個人的には思っていました。しかし、その時がくればきっと役に立つとも思っていました。その頃には大平研究会の処方箋に書かれたことの多く

が日本の常識になって、その常識を基にして、例えば憲法改正の必要とか集団的安全保障とかといったようなことも、言えるようになって行くだろうと期待していたわけですからね。

——先生のなさっているグローバル・コミュニケーションというのも、あの当時は夢のような話だったと思うのですが、もう現実になっていますからね。

公文 あの頃、インターネットなどは、まったく知られていませんでしたからね。

（平成十二年三月一日、グローバル・コミュニケーションセンターで取材）

公文俊平（くもん・しゅんぺい）

一九三五年、高知県生まれ。東大経済学部卒、六七年東大教養学部助教授、七八年同大学教授、八八年ワシントン大学教授をへて、九〇年国際大学教授、同大学グローバル・コミュニケーションセンター所長、現在にいたる。大平記念財団発足当初からの運営・選定委員。著書に『社会システム論』『文明としてのイエス会』（共著）、『ネットワーク社会』『情報文明論』など多数。

おわりに

大平は「ア－ウ－の大平」と呼ばれたところから、「弁舌の人」であるより「文筆の人」だと考えられてきました。しかし、数多く残されている対談やインタビュー記事に目を通して見ると、必ずしもそうとは言い切れないことに気付かされます。そのどれをとっても、自由闊達な発言ぶりで、かえってよく人柄や考え方を伝えてくれているように思えます。それからすると、大平は「文筆の人」であるとともに、「弁舌の人」でもあったのではないのでしょうか。その証として、はじめに代表的対談記事2編を選ばせて頂きました。

そこで今号のテーマですが、前号にひきつづき、21世紀を見据えた「大平政策研究会」の9大テーマを取り上げました。前号では「環太平洋連帯構想研究」に焦点を絞りましたが、今回は全体を俯瞰できる資料を選びました。

一つは、9つの政策目標の原点となった「政治に複合力を」（自由民主党総裁選への立候補に当たっての宣言文）と、いま一つは「大平政策研究会九つのグループにおける発言（要旨）」を選びました。

その上で、その研究会発足の経緯と意義については、大平の政策ブレイン・トリオのお一人である公文俊平先生の「文化の時代への先見性」（インタビュ）をご堪能ください。

この論考でご注目頂きたいことは、「文化の時代研究グループ」で示された折角の先見性が、大平なきあと失われた「不都合な真実」に言及していることです。コロナ禍の危機的状況下での「情報化・デジタル化の周回遅れ」の顕在化につながる問題です。この残された重い課題の処方箋については、『21世紀を創る―大平正芳の政治遺産を継ぐ』（PHP・渡邊昭夫編著・平成28年・財団30周年記念出版）の公文先生の「大平正芳の時代認識と21世紀」をご参照ください。

けんてきこう

硯滴考 [9]

令和三年六月吉日 発行

発行者 公益財団法人大平正芳記念財団

〒102-0082

東京都千代田区一番町 10 番地 相模屋第二ビル 5 階

TEL : (03) 3230 - 2213

FAX : (03) 3230 - 2214

URL : <http://www.ohira.org>

